


先週私たちは、約二週間もの間、地中海を漂流していたパウロとその一行（275名）が、無事陸に上がることができたのを見ました。ある夜、水夫たちが、陸に近づいているのを感じてから、夜が明けて、実際にみな陸に上がるまでも困難が続いたわけですが、でも主がパウロに語られた通り、彼と同船していた人々はみな助かったのです。一人も失われることなく、みなが陸に上がることができました。ちなみに、その島の名はマルタといい、イタリアのシシリー島の南約60マイルに位置する島です。パウロたちは、そこから再び出帆することができ、結果としてローマまで行くことができたわけですが、その経過を地図で確認しておきます。

11-15節を読みながら見ていきます。「三か月後に、私たちは、この島で冬を過ごしていた、船首にデオスクロイの飾りのある、アレキサンドリヤの船で出帆した。12 シラクサに寄港して、三日間とどまり、13 そこから回って、レギオンに着いた。一日たつと、南風が吹き始めたので、二日目にはポテオリに入港した。14 ここで、私たちは兄弟たちに会い、勧められるままに彼らのところに七日間滞在した。こうして、私たちはローマに到着した。15 私たちのことを聞いた兄弟たちは、ローマからアピオ・ポロとトレス・タベルネまで出迎えに来てくれた。パウロは彼らに会って、神に感謝し、勇気づけられた」。

このようにしてパウロたちは、カイザリヤを出帆してから、実に何カ月もの時間を得て、念願のローマに到着することができました。その後のことは、また次回見ることにして、今日はこのマルタ島での出来事に焦点を当てつつ、みことばに聴いていきたいと思えます。というのも、この話を知っている人には、ここで起こった出来事は、容易に聞き流すことができるかも知れません。でも、立ち止まって考えて見るなら、決してそうできないと思うのです。なぜなら、ここにもまた、私たちの常識を超えた出来事が記されているからです。

まず一つ目は、このマルタ島において、パウロがまむしに噛まれたという出来事です。2-3節「島の人々は私たちに非常に親切にしてくれた。おりから雨が降りだして寒かったので、彼らは火をたいて私たちみなをもてなしてくれた。3 パウロがひとかかえの柴をたばねて火にくべると、熱気のために、一匹のまむしがはい出して来て、彼の手に取りついた」。

もう一つのことは、パウロをして、彼がこの島の病人たちを癒してあげたということです。7-9節「さて、その場所の近くに、島の首長でポプリオという人の領地があった。彼はそこに私たちに招待して、三日間手厚くもてなしてくれた。8 たまたまポプリオの父が、熱病と下痢とで床に横たっていた。そこでパウロは、その人のもとに行き、祈ってから、彼の上に手を置いて直してやった。9 このことがあってから、島のほかの病人たちも来て、直してもらった」。

実に淡々と書かれてありますが、でも皆さん、もしこれらのことが、あなたの身に起こったことなら、どうですか？何の驚きや感動もなく、先に進むことができますか？もし私だったら、おそらく、この「まむし伝説」や「いやし伝説」を人々に語り続けたと思うのです。ただ、この手紙の著者ルカは、まむしに噛まれた時のパウロのリアクションや彼の発した言葉、彼が癒してあげた病人たちの病いがどのようなものであったかについては詳細を記していません。事実として、パウロが自分に取りついた「まむし」を火の中に振り落としたこと、そして、彼のもとに来た人々を癒してあげたことだけを記すのです。

では、そんなパウロに対する島の人々の応答はどうであったのか？4-6節「島の人々は、この生き物がパウロの手から下がっているのを見て、『この人はきっと人殺しだ。海からはのがれたが、正義の女神はこの人を生かしてはおかないのだ』と互いに話し合った。5 しかし、パウロは、その生き物を火の中に振り落として、何の害も受けなかった。6 島の人々は、彼が今にも、はれ上がって来るか、または、倒れて急死するだろうと待っていた。しかし、いくら待っても、彼に少しも変わった様子が見えないので、彼らは考えを変えて、『この人は神さまだ』と言いだした」。

島の人々のパウロに対する考えは、最初「人殺し」であったわけですが、それが後に「神さま」に変わったというのです。これはすごい変化ではないですか？彼らは、こう考えました。パウロをして、彼が海の難から逃れた後、それに続いて、まむしに噛まれたのは、彼のした悪に対する正義の女神からのさばきであると。つま

り、人々のうちには、人は悪を行えば、その報いとして罰を受けるという考えをもっていたということです。でもいくら待っても、パウロの身に何の変化も起こらないのを見た時、彼らは考えを変えて、パウロを「神」と言いました。毒をもつまむしに噛まれて何の害も受けないのは、常識的にはあり得ないことだからです。

この出来事を島の首長ポプリオも、その場において目撃したのか、それを人々から聞いたのか、または、まったく関係なしに、ただ旅人をもてなすというところからか、その辺りはわかりませんが、彼はパウロたちを自分の領地に招いて、三日間手厚くもてなしました。その際に、ポプリオの父親が、熱病と下痢で床に横たわっているのを聞いたパウロは、彼のもとに行き、祈りと手を彼の上に置くことで癒してあげたわけですが、そして、それを聞いた島の病人たちも、パウロのもとに来て、みな直してもらったというのです。その応答が 10 節「それで彼らは、私たちが非常に尊敬し、私たちが出帆するときには、私たちに必要な品々を用意してくれた」。

このようなことがあって後、「彼らは三ヶ月後に、マルタ島を出帆した」と続くので、これらのこと以外は特にそこでは何も起こらなかった、と考えることもできるでしょう。でも、パウロたちは、三ヶ月もそこに滞在したのですから、そこで彼が主のことを証しなかった、という方が無理があると思います。もしかしたら、そこで信じて救われる人もいたのかも知れません。そのあたりは、何も書かれていないので、推測の域を出ないわけですが、でも、もしあなたが島の人なら、まむしに噛まれても害を受けず、病人をみな癒すことのできるパウロを、そのまま見送って終わりにできますか？パウロのような人が、もし近くにいたら、あなたはその人のことを何といいますか？島の人々のように神と言いますか？神とは言わずとも、その人のことを他の人とは違い、特別扱いしようとするのではないですか？

ここでのパウロに限らず、私たちはこれまでもペテロが同じように病を癒したことを見ました。いや、癒しだけでなく、死者をよみがえらすことさえあったのです（パウロも）。また悪霊の追い出しや病の癒しに関していうなら、ペンテコステの日に聖霊が降る前にも、主イエスから権威を授けられた弟子たちによって、それらはなされていました。また、主が十字架の死と復活を遂げられた後、天に昇られ、ご自分を信じてバプテスマを受けるすべての者に、聖霊を与えられてからも、それらの働きは続けられたのです。では、そのような奇蹟を行った彼らは、神なんですか？かつては人であったけれども、主を信じた後は神となったので、そのようなわざを行えるようになったのですか？

この使徒の働きをもうすぐ終わるにあたり、私たちはその最初のところで主が弟子たちに語られたことをもう一度、確認しておきたいと思います。使 1:8 「しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります」。主イエスを信じる者に、聖霊が臨み、この方を通して力が与えられる理由は何ですか？それはキリストの証人となるためです。主を信じるすべての者が、いつでも、どこでも主の証人となるために、主は必要な力、つまり、助けを聖霊（ご自身の霊）を通して与えて下さるのです。そして、それはちょっとした助けではなく、デユナミス、つまり、私たちの考え、想像を遥かに超えた爆発的な力、神の力を意味しています。

ですから、主は言われました。「もしからし種ほどの信仰があれば、山をも動かすことができる」と。主は、私たちに「大きな信仰、強い信仰があれば」とはおっしゃいません。なぜなら、それは私たちにはどうあがいても無理なことだからです。でも、山が動くかどうかは、それを動かすことのできる方、つまり、この天地万物を創造し、それを御手の中に治めておられる主の側にかかっているのです。その主を、そのまま力ある方として信じるのが私たちに求められています。そして、信じる者は、主によって山が動かされるのを見るのです。到底不可能と思えることでも、現実となるのを主を信じる者は知るようになります。

では、ここでのパウロの信仰とは、どのようなものですか？まむしが自分の手にぶら下がっているのを見て、それを火の中に振り落としたこと、それが彼の信仰ですか？おそらく、ここにいるほぼ全員が、パウロのように、反射的にそれを振り落とそうとしたと思います。つまり、まむしを振り落とす、という動作それ自体を信仰というのは無理でしょう。ただ、彼がそこでパニックにならず、何もなかったかのように過ごしたところに、彼の主に対する信頼を見れるように思います。つまり、「もうダメかも知れない」という中でパウロに現れて、ローマ行きを約束された主は、迫害や難船から救い出して下さっただけでなく、この後も自分を守って、必ずローマへと導かれる、という主への信頼と確信が、パウロのうちにあったと思うのです。

また、ポプリオの父を癒した時には、パウロは、自分からその人のもとに行った、とあります。つまり、病人を癒すこと、それは彼にとって、主から与えられた大切な働きの一つ、ごく当たり前のことであったということです。皆さん、そのような信仰をあなたはお持ちですか？「祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります」（マル 11:24）という信仰を、あなたはおもちですか？

聖霊を受けた後のペテロやパウロの歩みを見る時、その姿が主イエスご自身と重なる時があります。それは、主イエスが、父なる神様とそのすばらしさを知るゆえに、心から父に信頼し、そのみこころに忠実に従われたように、彼らも、自分の救い主イエスとその主のすばらしさを知るゆえに、心から主に信頼し、主のわざに励んでいたからだと思うのです。そのようにいうと、「やっぱり彼らはすごい人だ、自分とは違う」と、彼らの信仰深さとか忠実さに焦点を当てることで、そのように言う方もおられるかも知れません。でも、それは彼ら自身のすごさではなく、むしろ、彼らが自分の小ささ、その罪深さを知っていたから、また、そんな者を選んで、救って下さった主のあわれみと恵み深さを、彼らが赦される経験を通して味わい知っていたからです。

皆さん、主はそのような人をご自分の証人として用いられます。自分の利益のため、自分を誇るためではなく、主イエスを誇り、主の御名の証のために、みことばと御霊に導かれて歩む者を、主は恵みの通り良き管として用いられるのです。パウロは、あのダマスコ途上に至るまでは、実に高慢で、自分の目に正しいと思うことを神様にも喜ばれることだと確信していました。でも、そんな彼に主が現れ、その頑なな心、自己中心な心を砕かれた時、彼の心の目は主によって開かれたのです。自分の愚かさ、小ささ、罪深さがわからされると同時に、そんな者に主が示して下さったあわれみと恵みの大きさを彼は知るようになりました。そのようにして彼のうちで、自分の考えではなく、主のみことばに、自分の力ではなく、御霊の力により頼むということが、いよいよ大きくされていったのです。

たとえ、それがまむしに噛まれることでなくても、この世にある限り、私たちは悪魔の攻撃によって害を受けそうになることがあります。「自分はもうダメだ」と思うようなこともあることでしょう。また信じて祈っても、そのようにならないこともあります。みことばと御霊の助けを信じて、主のわざに励んでも、目に見える成果が見られず、失望しそうになることがあるのです。でも、そのような中でこそ、本当の意味で、私たちの信仰は問われます。

主は、逆境と思えるような中でも、からし種ほどの信仰をもってご自分に近づく者に、みことばをもって語り、また御霊をもって、その人をご自身の御力で覆って下さるのです。そしてご自身が、父の約束としての私たちの救いの喜びをその先に見られることで、十字架の苦しみとその死を耐え忍ばれたように、私たちにもご自分と一つにされていることのすばらしさを味わわせて下さることで、私たちをいよいよ御国を待ち望む者として下さいます。私たちをして主の証人としての歩みを最後まで全うさせて下さるためです。十字架の死後、三日目によみがえられた主は、今日も生きて、父なる神様の右の座で私たちのためにとりなして下さっています。私たちの方から進んで主を離れることがない限り、この主の愛から私たちを引き離すものはありません。